

カラドン遺跡の仏教寺院

伊藤, 玄三

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

119

(発行年 / Year)

2003-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003987>

カラドン遺跡の仏教寺院

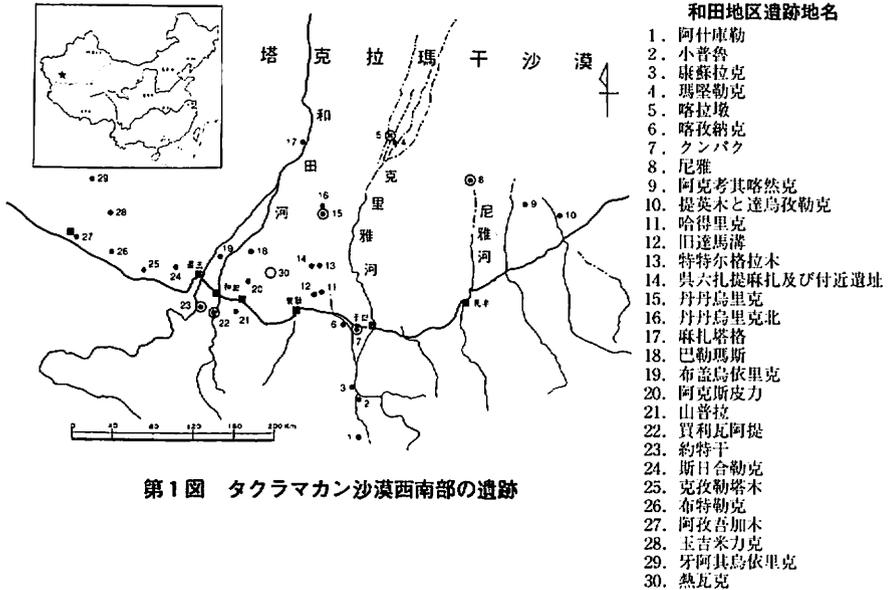
伊藤玄三

まえがき

日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査を行ったのは、1991・1992年の兩年夏おそい頃であった。筆者もこの調査に参加したが、その二回目の1992年の調査の折にケリヤ（克里雅）河下流に向った我々の調査支隊の大きな目的の一つは、かつてスタイン英国隊が発掘調査をしているカラドン（喀拉墩）遺跡まで到達して、古代遺跡と環境を考えようとすることにあった。

このカラドン遺跡は、ヘディン⁽²⁾も踏査しているけれども、本格的な発掘を行ったのは1901年のスタインの調査である。その成果から、この遺跡には一辺約60mの方形遺構が存在し、古城砦乃至は宮殿の遺跡と推測される性格のものが指摘されていた⁽³⁾。我々もこの遺跡に到達し、炎熱下砂丘表面50℃を越す方形遺構で略測・写真撮影を行った⁽⁴⁾。その直後、翌年から三次にわたって中国とフランスの合同調査隊がこの地域に入域し、一帯の分布調査・発掘を行った。その中仏合同調査隊の発掘成果の概要が『考古』1998年第12期⁽⁴⁾に報告されたのを見て、実は非常な驚きを感じた。我々が通過していた間近の寺院跡が発掘され、そこでは仏像壁画も発見されていたのである。この中仏合同調査では、カラドン古城、民居、寺院、灌漑渠道から、更にすすんで約40km奥地の圓沙古城と古墓群の一部の調査も行っている点でも注目され、一層奥地にも明確に遺跡があとづけられることがわかった。

このカラドン一帯の遺跡の状況が明らかになってきたことによって、旧河川流域とはいえ沙漠中央部の遺跡においてもオアシス地域と同様のものがあり、広範な沙漠地域の文化を総合的に検討していく必要があることが強調されるよ



うになってきたといえる。

そこで、本稿ではカラドン遺跡発見の寺院・壁画をとりあげて、沙漠中央部での調査成果に知られるところから若干の課題を考えていくことにしたい。

なお、本稿の主要資料は前述の『考古』誌上に報告された成果を用いるが、加えて'02年8月20日～10月6日に東京国立博物館主催の日中国交正常化30周年記念特別展「中国新疆絲綢之路文物展シルクロード—絹と黄金の道⁽⁵⁾」に際して修復されて陳列されていたカラドンの壁画実物も参照した。これらの壁画資料が実見できたことも本稿作成の契機の一つである。

第1章 カラドン遺跡の調査

カラドン遺跡の最初の踏査は恐らくスウィン・ヘディンのものであろう。ヘディンは1896年冬、ホータン（和田）からダンダンウイリク（丹丹烏里克）を経てカラドンを見、更にケリヤ河を降って3月にロブノールを採検している。ただ、ヘディンは地理的調査を主眼としており、考古学的発掘はひかえている。⁽⁶⁾

カラドン遺跡の本格的調査は1901年3月にスタインによって行われた。彼の

調査では、主としてカラドン古城即ち「黒い丘」の方形遺構を中心としたものであり、その門跡とされる屋蓋までも遺存していた建物跡並びに古城内部の建物などを発掘している。ただし、この発掘ではそれ程多くの資料は得られなかったようである。しかし、その前にスタインが調査したダンダンウイリクなどと共にケリヤ河下流にまでこのような遺跡が存在することが当時明らかになったことは極めて注目された。

この後、カラドン地域への調査として注目できるものは1990年秋の新疆克里雅河及塔克拉瑪干科学探検考察隊⁴⁷⁾によるまでまたねばならなかったようである。中国解放を経て20世紀末の90年代に到って、タクラマカン砂漠の資源探査と外国からの合同調査及び観光客の誘致は、この地域への訪問者を急激にふやし始めた。

ところで、この新疆ウイグル自治区農業区画委員会が組織した科学考察隊の主目的は生態環境と地域開発にあったが、その一部としてカラドン遺跡の調査が認められる。調査は、新疆維吾爾自治区博物館のメンバーによって行われ、報告書中に呉州・黄小江「克里雅河下遊喀拉墩遺址調査」として見られる^{*}。その報告中に「城堡西南の仏寺遺址」なる一節があって、カラドン遺跡において初めて仏寺遺址の存在がとりあげられた。この際の調査では、いうまでもなく古城・作坊・民居・墓地などについても触れているが、当面の課題である寺院の存在の指摘は注意される。同時にこの折に寺院跡と推定された論拠の一つとなった忍冬文壁画⁴⁸⁾(第12図1)の存在は筆者が関心を強くもったところである。なお、この科学考察隊には日本からテレビ東京のスタッフが参加しており、年末のテレビ放映によればケリヤ河を下降してタリム河の合流点まで踏査していることが知られた。

翌1991年には、我々の日中合同調査隊が入域するが、この第一回調査の折にはカラドンの手前約40kmのタリヤポイ(達里雅博依)郷大河沿までしか到達していない。しかし1992年の第二次調査においてはカラドン故城を訪ねており、その掃路に木柱が多数林立している遺跡を写真撮影した。この遺跡にいた時は夕方の斜陽の中であり、中国側スタッフもこの遺跡は初見とのことで十分な知見が得られなかった。ただ、私見では先の科学考察隊が報じている城堡西南の仏寺遺址がこれに相当するものであろうと見ている。建物の壁面の遺

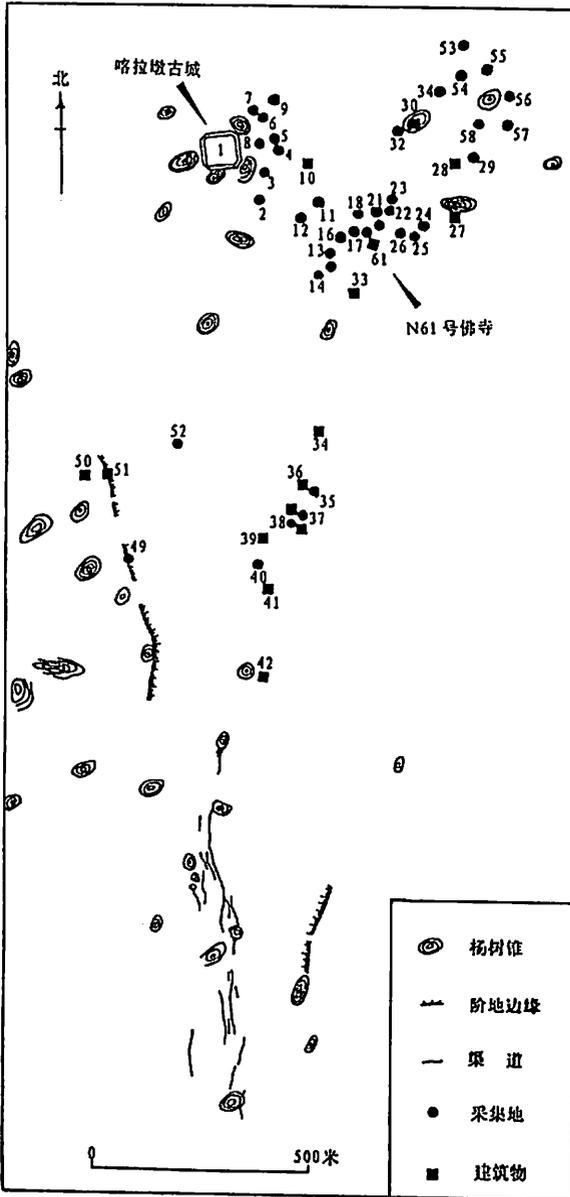
残も見られたが、壁画等を確認する余裕もなく帰路を急いだのが今は残念である。後述するように、この建物跡＝仏寺跡が中仏合同調査隊の調査したとされるN62号仏寺に該当する可能性が強い。

つづいて1993・1994、1996年には、中仏合同ケリヤ河考古考察隊がカラドン一帯の考古学調査を実施した。この調査は、明確に考古学的調査を目的とするものであり、カラドン古城一帯の遺跡分布図（第2図）を作成し、さらにカラドン古城・仏寺・民居・渠道、そして圓沙古城・墓地までも調査している。その中、特に課題となるのはN61号とN62号の仏寺とされるものである。N61号は第2図に見られるようにカラドン古城東南400m程に位置しているが、N62号は古城西南約1kmに位置する為に図中には示されていない。共に壁画を有するものであり、しかも同様の構造をもつ寺院であったことはこれまでの知見に大いに加味されるものがある。この成果によって、カラドン遺跡の内容がかなり詳しく知られるようになったと共に、このタクラマカン沙漠中央部の遺跡の性格も極めて明確化されることになったと看取できる。

なお、カラドン古城を訪ねた折に気づいた事ではあるが、この古城の遺存木柱等に幾つかの切込み落書が見られた。それによると、近年幾つかの中国踏査者が入っていることが知られ、年月日も記されたものもあった。正式の調査以外にも時折訪問者があったことは明らかであり、またウイグル牧畜民のガイド兼駱駝使い達も迷うことなく案内しているところをみると遺跡周辺を熟知していると見られ、我々に伝えられている程には未踏の地ではないのだろう思われた。事実、欧米の観光客も我々がタリアポイに帰着した時に駱駝の背に揺られながら出発していったのが違和感を誘った。今も昔も、沙漠は全く人跡未到ではなかったかも知れないと思ったところである。

第2章 カラドン遺跡

カラドン遺跡は、タクラマカン沙漠西南部のケリヤ河流域に存在し、新疆ウイグル自治区于田県タリアポイ郷の北部に位置する（第1図）。于田オアシスよりタリアポイまで直線距離約190kmとされるが、自動車走行では200kmを越すだろうという。そのタリアポイ（大河沿）からカラドン遺跡群は、さらに西



第2図 カラドン古城周辺遺跡分布図 (『考古』1998.12)

北へ約20kmとされ、我々も駱駝行で往復3日間の行程であった。1990年の中国側の測定では、カラドン古城の位置は東経 $81^{\circ}50'02''$ 、北緯 $38^{\circ}32'32''$ である。

この地点は、ケリヤ河が大河沿オアシス以北で幾条かの支流に分岐する北方の低い河岸段丘上に、長さ約6km、幅4km程に遺物を散在させている。さらに前述したように、中仏調査隊によれば北方下流約41kmに圓沙古城一帯の遺跡群が存在することになり、北緯 39° 近くの沙漠中央部まで遺跡が確認されることになった。

現在のケリヤ河は、昆崙山脈から氷河雪融け水を急流として北山麓まで押し出した後、普魯から于田オアシスまで緩く流れ下る。于田よりは沙漠地帯に静

かに北流している。ただし、1990年の中国探検考察隊の観察では大河沿の下流まで河流が認められているが、1991年の我々の見た時には大河沿に河流は未だ見られたのに、翌1992年の同時期には大河沿の上流で水流は止まっていた。いわば、河流が年々減少していることになろうが、カラドンへの駢行でどったケリヤ旧河床は白っぽい水流細砂の面を止めており、かつて幾度かの河流があったことを示していた。今は末無河となっているが、空中写真でもメアングした旧河床が北方のタリム河との合流点まで続いているのが見られるから、かつては予想以上の河流があったことが推測できるし、年毎の差異はあったとしても近年のように干河になっていたとは思われない。遺跡の存在もまた、カラドン地域でのあれ程の生活の可能性を推測させるに十分な条件をもっていたものであろうと考えさせるものがある。

カラドン遺跡は、古城跡を顕著なものとして知られてきたが、これまでの調査成果からそのほかに仏寺、民居、墓地なども調査・推測されており、広域的な遺跡群であったことが推測できる。その中、民居などの集落遺跡はともあれ、古城跡や仏寺跡の存在はあらためて注目すべきものであろう。

カラドン古城とされるものは、1986年のスタインの測量で明確化された。スタインは報告書中に平面図³¹を示しており、一辺約60mの方形の壘壁状の遺構が描かれている。但し、1992年に我々が踏査した時の所見では、砂丘に埋れているこの遺跡は多数の木柱材をもっており、立柱遺残や壁体の遺存が方形に連なる建築遺構群ではないかと観察された。既に拙稿でもふれておいたが、その見解は平面図と共に示したことがある³²。一般的な城壁は版築などによるものと考えれば、このカラドンの方形遺構は建築群の連なりとなる。構造上で特殊であり、城砦的性格と直結するにはためらいがある。とはいえ、この種の規模、平面などには一般民居とは異なる性格をよみとることができることは確かであろう。即ち、カラドンのこの方形遺構は、この一帯の遺跡中でもしかるべき役割を担うものであったことは推測できよう。

カラドン遺跡では、仏寺は一応2個所で確認されているといえる。それも、所謂カラドン古城の近傍に存在するといえる。広い遺跡群の中でも、仏寺が二つ存在しているところをみると、この付近がやはりカラドン遺跡の有力な拠点となる場所であったろうか。遺物が広範に散布している点でも、方形遺構や

仏寺存在に広い背景があったことは容易に推定できる遺跡群である。なお、このカラドン遺跡群の南部には灌漑渠道とされる水路跡（第2図）が指摘されており、かつての河道からの給水路ということになる。筆者も砂丘下へのぞく地層の溝状変化に気づいていたが、やはり中仏調査隊が指摘している。これが事実とすれば、牧草地や耕作地への給水も行われていたことになり、主牧副農の生活様相の復原に一つの有力な傍証が与えられることになる。因みに、カラドン遺跡では、多数の土器等と共に羊・馬・牛・駱駝の家畜類の骨と野生獣骨や鳥類の骨が出土しているのに加え、麦も発見されている。

第3章 カラドンの寺院と壁画

先に述べてきたように、カラドン遺跡群中には2個所で仏教寺院が発見されている。その一つは1900年中国隊によって報告されている「城堡西南の仏寺遺址」とされているものであり、他の一つは中仏調査隊報告のN61号仏寺とされるものである。前述したように、前者は、筆者のみるところでは中仏調査隊でN62号とされているものと同一の寺院跡と思われるので、本稿では一つの寺院とし扱っておく¹¹²。

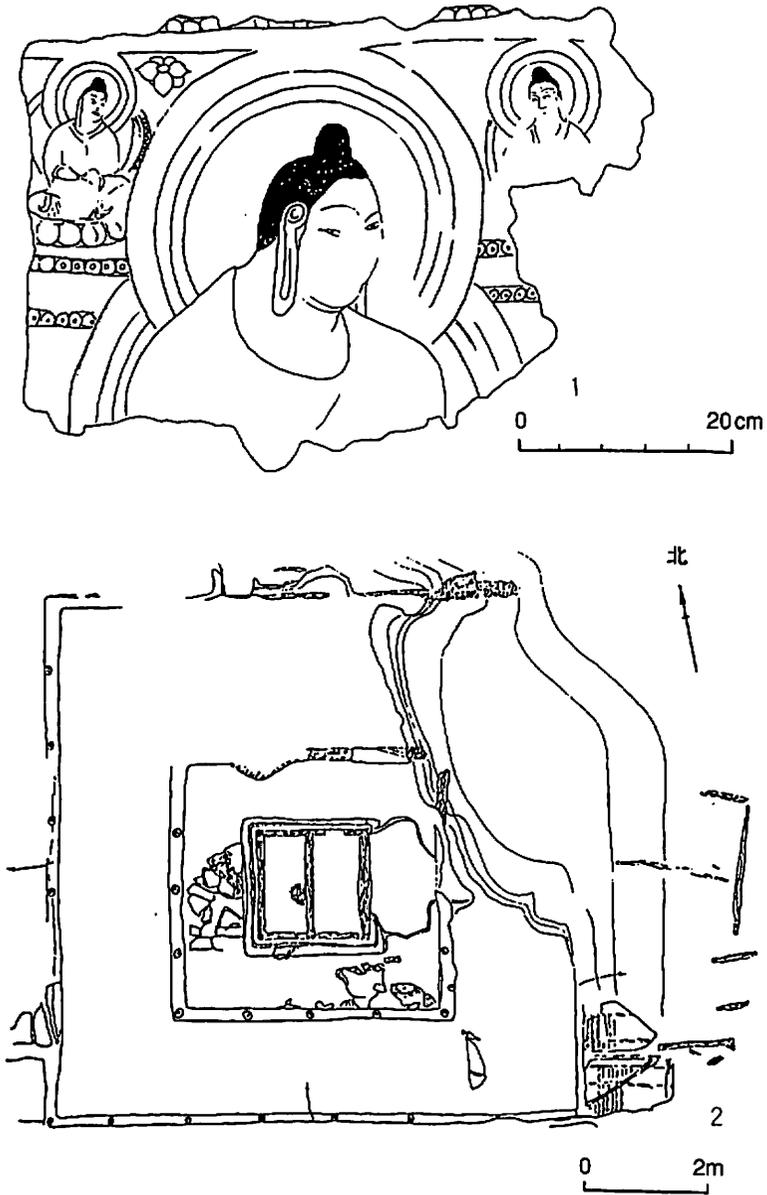
(1) 城堡西南の仏寺＝N62号仏寺

この寺院は、カラドン方形遺構＝城堡の西南に位置し、約1kmの距離に位置するとされる¹¹³。但し、中仏調査隊報告では城堡の南側とのみ書かれ、距離の記載は無く、更なるその報告の図二（第2図）中の南側1km付近にはN62号に該当するマークは見当たらない。恐らく、中国科学探検考察隊のいう城堡西南とする記録が正しければ、第2図の分布図には枠外となって示せなかったものであろう。その点で加えれば、我々がカラドン方形遺構から帰路としてたどった方向は前方右手に夕日を眺めながら進んだ途次に立柱遺残の建物跡を発見しており、その位置は南方と漠然というよりは西南方であったとすべきであった。そして、この建物跡は我々が検討する時間的余裕が無く、確認することはできなかったけれども、筆者には遺存状況からみても寺院跡ではなかったかと思われたところである。もし筆者の推測通りとすれば、これがN62号仏寺と一致し、

それが外ならない「城堡西南的仏寺」ということになる可能性が強くなる。

ともあれ、この仏寺関連の記録の最も詳しいのは1990年の中国科学探検隊の呉州・黄小江氏の報告である。即ち、その要点は次のようになる。この建築跡は、一連の回廊形式に左右対称に並んだ帯状の建築で、長さ20m、幅7m余のもので、長い方向に大部分が流砂で覆われ、特に西南角の部分は砂丘下に入っていた。露出してみられる木柱は数十本あり、立柱上部には出杓があり、側面には相対して貫穴がある。屋蓋は遺存していないが、平頂式であったとみられる。室内には1m以上積砂がみられ、地表には遺物が殆ど発見できないが、僅かに1点の木製鞍残片が知られた。東半部中間の房室門は内向開閉で、三枚の厚板からなっている。壁体の観察では、厚さ10cm以下で、内部は横向きの芦苇と縦に立てた小枝で編み、その外側に少量の草を混じえた泥土で塗り、その面を平らにした後白灰（石膏）を刷いており、部分的に露呈している個所には褪色した赤色が横線として見える。部屋数は10余間あり、西半部中間の一室南壁中央に壁画があった。それは白色壁上に4条の平行幅広の赤線が遣り、中間の2条の平行線中に紫・赤・淡藍からなる忍冬文図案が描かれ、西寄りに忍冬文上部に赤色で描かれた脚部が識別でき、立式の造形の一部とみられる。未発掘であるので詳細は不明であるが、遺存する壁画より見て、この長い建築は仏寺であろうと判断された。この仏寺の付近に一つ建物跡があり、構造・特徴より家畜用のものとみている。他にも木材露出個所があるとされ、この一画にも寺院と関連する民居建築があったものであろう。

ところで、中仏隊の記録ではN62号仏寺は城堡南側にあるとのみ記され、詳しく位置は示されていない。そして、N61号仏寺とまじえて記録されていて、明確ではないところがある。なお、その中から要点をあげれば、流動砂丘下におおわれながら一部の遺構部分がみられ、平面回字状の方形建物である。建築は、木組みに泥壁（木骨泥墻形式）が用いられ、壁は厚い。壁体は傾いて、大部分寺廟の内側に崩れていた。構造上では、N61号と同様であるし、壁画は北壁向って左側から出土したとされるものが、前述のシルクロード展のNo.124として出陳されていた（第3図上）。大形の立像の上半部と見られているが、中国科学探検考察隊のしている忍冬文上部に認められた赤色で描かれた立像脚部と関連するものかと推測されるところである。



第3図 カラドンN62号仏寺壁面如来像とN61号仏寺平面図
(['シルクロード展'] 並びに ['考古'] 1998.12)

なお、中国科学探検隊は未発掘で、長い回廊状建物と報じている点は、恐らく立柱の遺存の表面観察であるので、中仏隊の回字状方形の遺構とする発掘結果が正確であろう。前者は、近傍の立柱列と関連させて理解した為の誤りであったと思われる。

(2) N61号仏寺

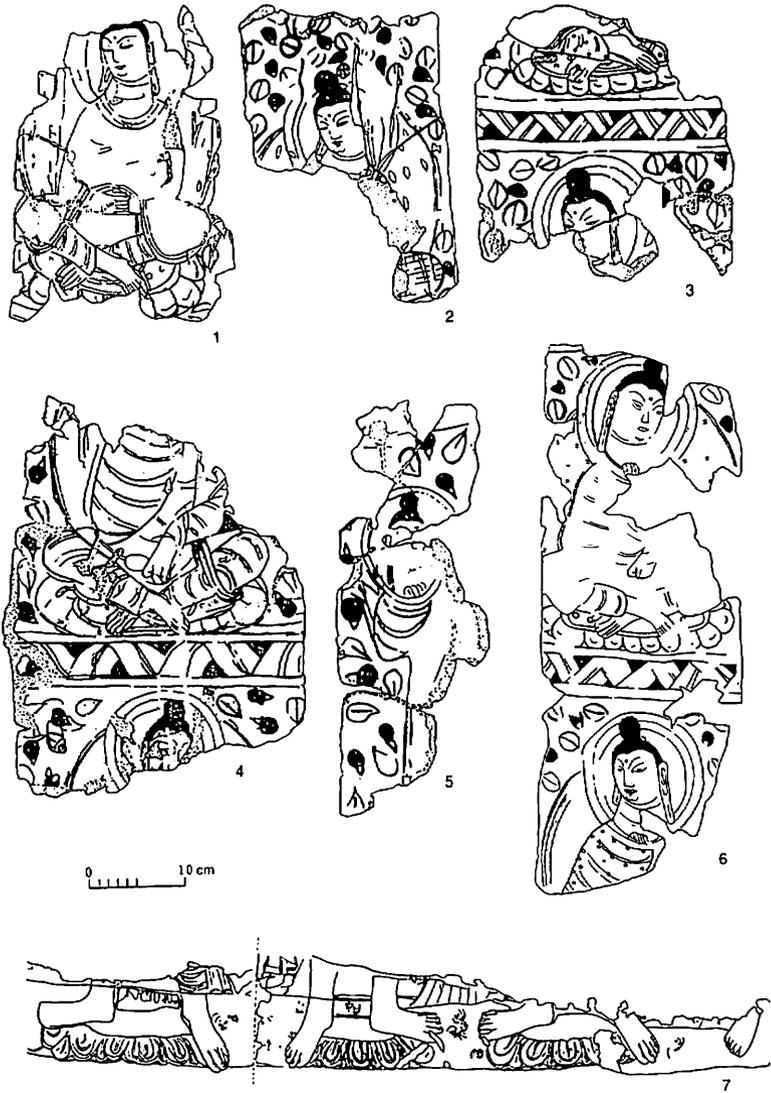
カラドン方形遺構の東南約400mに位置するものであり、中仏隊の1994年調査は顕著な成果の一つとなるものである。この寺院跡の周辺には、比較的多く遺物採集地が存在しており(第2図)、ここもまた一つの有力な遺跡中心地であった可能性がある。

寺院跡は、N62号と同様に砂丘におおわれており、外側回廊一辺8.5mの規模である。調査の結果では、平面回字形の方形遺構であり、建物構造としては所謂木骨泥牆の形式である。壁は比較的厚く、但し現存壁体部分は底部高20~90cmを遺存するに過ぎない(第3図)。寺院中心に向って壁体が崩れて堆積していた。寺院の中心には塔礎が推定可能であり、一辺2mの粘土質底部が正方形に遺存している。中心塔の外側には二重の回廊があり、それぞれ約1.5m間隔がある。この寺院の出入口は外壁北側にあると考えることができる。壁の下部には台木が置かれ、一辺8本の立柱を基本とした外壁と、内側の壁には一辺5本宛の立柱があった。壁画は、中心塔外壁及び回廊内外壁面に描かれ、良好に崩れて遺存していた。これは、現場で保存技術処理をした後搬出された。壁画の描かれた二重の回廊は、他の近隣寺院例からみても右邊^{うへ}札^{にょう}用の構造である。第5図に掲げたニヤ遺跡寺院例が一重であるのに比して二重の回廊もっている点に特色がある。

(3) カラドン寺院の壁画

二つの寺院では、共に壁画が回廊に描かれていた。その中、61号仏寺は比較的良好に遺存していたが、62号仏寺では損壊が激しく、僅かに一部が知られたに過ぎない。勿論、公表されていない残片はなお採集されていることは予測できるので、あるいは採集の復原作業によっては付加されるものがあるかも知れない。

遺存の比較的良好なN61号の壁画例は第4図に示した。第4図の6は『シルクロード展』の写真を参考とするものであるが、他のものは『考古』の図の接合線などを消去して掲載してある。この61号壁画では、仏像の表現その他に一貫した特色が認められ、恐らく同一人の描写であろうと推測できる。即ち、仏像は頭部に肉髻をいただき、図の表現では定かでないが実物や写真では肉髻下部を紐で締めていることをうかがわせる6の例があり、概して細く高い肉髻表現となっている。また、頭部も注意してみると僅かに凹凸表現がみられ、螺髪を示すものであったことが知られる。顔面は、左右に向くものがあり、恐らく壁面の位置によって異なる方向に描出されているのであろうか。両耳は、肩近くまで長く下がっている。顔は豊かな表現をとり、円顔といえよう。眼・鼻・口の表現も明瞭で、眉間に白毫をもち、比較的鮮明な線で描かれていて、顎のふくらみも加えられている。衣服は両肩をおおう通肩である。脚部は交脚座で、右脚を上にしてしている。蓮華座の上に座しているこの姿は、壁面二段構成となるこれらの仏像の上段の様相である。唯、これらの如来像では、知られる範囲では印相が様々であり、1は法界定印であるけれども、4・6の座像の左手は両膝間において大衣の裾を握っている姿である。この4・6の座像では、共に左傾の姿勢とよみとれる点では、同様の姿相表現を描いていたものかと思われる。更に、6の上下段に連なる立像と座像では右手先が大衣の首元で襟をつまむ表現となっている。同様の表現は5の立像にもみられる。この種の表現は、ホータン周辺の仏像や、更にアフガニスタン方面の仏像にも見られる特徴ある表現とされる。着衣は、桔紅や茶褐色、灰色などに描きわけられており、それぞれ多彩な表現がとられている。また、膝下の衣も大衣とは色違いの白色小円文をもつものなどあり、裳の表現となろうか。同じ文様の白色小円文をもつ衣をつけた立像が6の下段にみられるのも面白い。座仏の背後には頭光・身光がすべてに見られるが、頭光は桔紅色の輪郭の中を白色として頭部を浮き立たせている。それに対して身光の表現は輪郭線内を紅・茶・灰などと見られるものがあり、6の座像の例では小さな二対の白色が散らされた文様すらあるようで、変化を与えている。座仏の座する蓮華座は、中房に桔紅で小円の蓮子表現があり、蓮弁は外反する形で指先状の表現を連ねている。仏像の周辺の空間には、蓮弁や蓮子かと思われる白・黒の2種の文様が散らばされた表現となって埋め



第4図 カラドン遺跡61号寺院壁面如来像 (『考古』1998.12)

られている。

この座仏の下段には、4線の帯状表現を色分けして交叉させたような幾何学的構図の文様帯を界して立像が配されている。立像の表現も基本的には座像と同様である。唯、惜しまれるのは立像の身部が図示されたものが見られないので、具体的立像がこの寺院例ではうかがえない。幸いにも、脚部は建物遺構の下部に遺存していた。第4図7がその図である。そこには蓮華座上に立っている立像脚部が4体分知られ、それぞれ交互に左右の足先を前方向と横外側方向に向けた表現がとられている。この脚部の姿勢は、その上にくる立像が相互に隣りあわせるもので向く方向を違えていることと関連するものであろう。脚部近い裾表現では、7の左端左脚には脛部に横ひだの裳表現と縦ひだの衣裾が見られ、2・3体目の間にはやはり縦ひだの裾表現が観察される。共に立像下脚部の様子がうかがえる資料である。立像はそれぞれ蓮華座上に立つが、蓮弁は座像の場合と異なって輪郭線は二重であり、かつ中央に縦線の表現をもつ。恰も重弁の如くであり、さらに各弁間には間弁が描かれており、座像の指先状表現とかなり差異を示したものとなっている。この脚部の描かれている下段部の背景には白色横帯部に細かな草花や植物文の図案化されたものを配している。

これらの壁画は、上段座像部は高さ130cm、下段は235cm前後の間に描かれたとみられ、かなり大形の壁画装飾であったと推測できる。ここに描かれた仏像は立像と座像の差はあるけれども、すべて如来像であり、表現も該して簡素な感じである。けれども、手印の中などには仏陀の姿相を幾つか示したものがあるようである。描写された顔容からも、比較的古い仏像表現であり、インド・パキスタン方面との関連が指摘される場所である。

62号仏寺出土の壁画は、遺存状態が良くなかったといわれるが、『シルクード展』の124図で知ることができた。即ち、第3図上段のスケッチのようなものである。62号仏寺北壁から落下損壊したとされるこの壁画は上面向きであったことと、後に洪水で洗われて傷みがひどく、61号壁画に比して知られるところが少ない³⁵。

この壁画は縦約1mの画面の中央に斜め左方に向く大型如来像が描かれ、その上部左右には中央に向く小型如来座像2体が配されている。中央の如来像はその大きさからみても立像とされている。即ち三尊構成の表現である。かなり

復原されているようであるが、中央大型立像の頭部は肉髻がもりあがり、僅かに周縁に凹凸をよみとることができそうであるので螺髪表現とすることが可能である。耳は長く垂下する。顔面は明らかではないけれども、やや左向きであり、顎の輪郭から推しても円顔であろう。眉・眼の表現が僅かにたどれる程度で、鼻・口は欠失している。首筋の太く感ずる体軀に赤色の通肩を着する。頭光・身光が背後に認められる。この立像の上部左右の内向きの小型座像も肉髻・螺髪の黒色表現を示し、向って左側の座像の手印は法界定印かと思われるが、他は不明である。この壁画は、61号仏寺壁画に比して黒色や白色の使用が顕著でない為に柔かな赤色・桔紅色であり、薄い印象の表現となっている。勿論、両者共に顔料の変色などもあり得るかも知れないことは考えておく必要がある。ところで、比較的よく様相が追える向って左上の座像を見ると、蓮華座上に座しており、その蓮弁表現は弁上に縦線を配するものと観察されるから、同じ蓮華座表現でも部分的差異が指摘できる。又、この小型座像の右上の空間には大柄の花弁を示す花文が描かれている。

さらに、僅かな表現をたどると、この座像の下部には連珠文帯に挟まれた無文帯が横に延びていることが知られ、それは中央立像の右側に部分的に見えていることもわかる。連珠文の中央には、さらに小円文が加えられていることが看取できる。その点では、この壁画の上縁にも赤色界線上にやや大型の珠文が連なっていることが知られ、周縁に連珠文が多用されていると見ることができ

る。このように見てくると、両寺院の如来像表現には若干の差異が見られそうであり、両者の所属時期などにも課題があることが予測される。因みに、中仏隊報告では、カラドンの壁画の年代はほぼ3～4世紀頃とし、中国仏寺例としても最古例の一つとしている。「シルクロード展」では漢～晋時代即ち3～5世紀としている。中仏隊報告では3例の14C測定年代も記しているが、N61号の2例の資料ではBP.1910±250年、BP1193±86年、そして62号の1例ではBP1800±40年となっている。この3例の中、最も遅い年代となるN61の1例は中国社会科学院の測定であり、他はフランスでの測定値である。後者の測定値がAD200年前後まで遡るが、誤差の範囲を見れば壁画から推定される3世紀頃に近い。14C年代が新しい年代では誤差が大きい点も考慮する必要があるので、

なお確実な年代は得られないということになる。

更に注目しておくべきことは、二つの寺院の壁画の技術がある。既に中国隊の「西南的仏寺」項でも述べたところと通ずるものがあるが、中仏隊の新しい調査報告によると、壁体は民居と同様の木骨泥墻形式であるけれども、壁は細密な粘土で面を整え、表面は一層を石膏で塗っている。その後に壁画が描かれている。この種の壁面調整は、ミーラン（米蘭）などでも知られていることが指摘されていて、この地域に共通の壁面調整であり、基本的には簡素な技法であろう。壁画使用の顔料は、主要なものは三種があげられており、即ち紅・桔紅・黒とされている。原料は分析中とされているが、濃淡などもあるのでその他のものもあるかも知れない。これらの顔料で描かれた61号寺院の壁画は黒色のラインが比較的強くみられ、どちらかといえば褐色を帯びた紅色や黄色の強い桔紅色の画面を鮮明に強調している。それに対して、62号寺院の壁画は黒色線は少なく、どちらかといえば淡い紅色や桔紅色の表現となっていて、鮮明さに乏しい。水流に洗われた形跡があるといわれるが、顔料・描出の差かと考えられる。なお、61号寺院壁画の如来像顔面には白色でハイライト表現すらもとっていることが指摘され、繊細な感覚をうかがわせている。

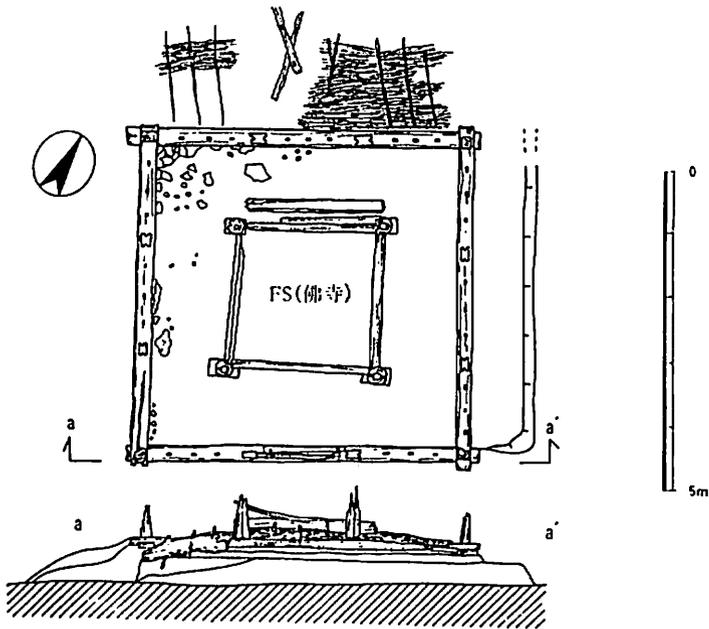
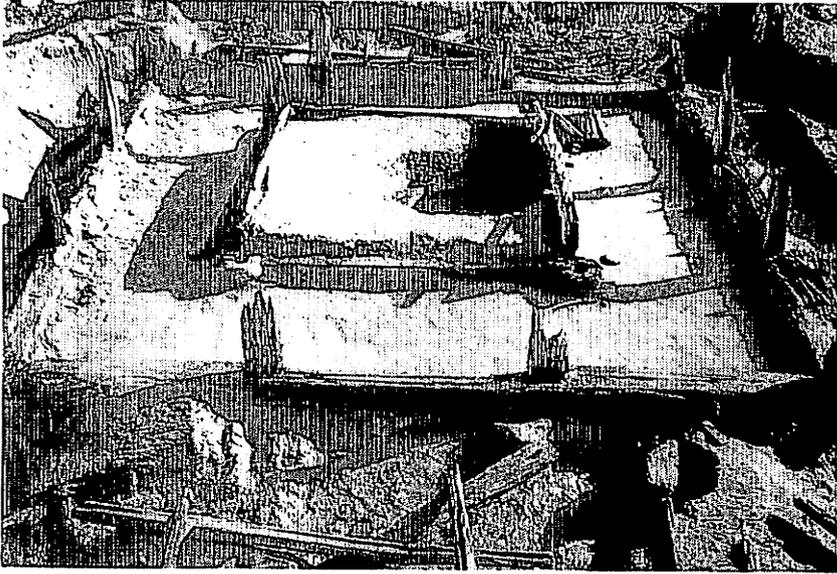
第4章 周辺遺跡の仏教寺院

カラドン遺跡の位置するケリヤ河下流三角州地帯にも壁画の明確な寺院跡が判明したわけであるが、このような仏教寺院は西域南道において幾つか認められてはいた。しかし、これまでは最奥部のカラドン遺跡群中に同様のものが跡づけられるとは予想外であった。その点では、あらためて、カラドンの寺院跡とそれらの周辺遺跡を対比してみる必要があろう。

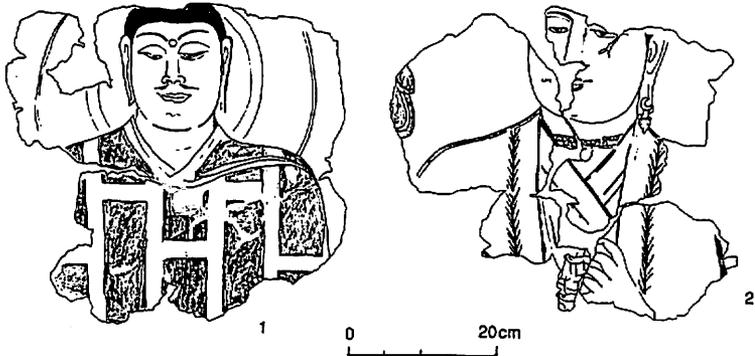
カラドン遺跡群に比較的近く存在する遺跡としては、かつてスタインが調査して著名なニヤ（尼雅）遺跡が東南東約100kmに位置している（第1図）。このニヤ遺跡は、近年仏教大学に研究機構をもつ中日共同ニヤ遺跡学術調査隊による発掘調査とその成果である二冊の報告がみられ、その第二巻に寺院調査例をみることができる。⁶⁶ニヤ遺跡には、いうまでもなく仏塔跡も遺存し、日乾煉瓦積の遺構が知られている。漢代からの精絶国の遺跡とされるこの遺跡にふさわ

しい寺院跡が伴っているとされよう。しかし、今回のニヤ遺跡調査隊の調査成果では、仏塔跡以外にも第5図に示すような寺院跡が存在することが知られた。この寺院跡は93A35 (N5) と命名されている。一辺約5mの建物の下部が僅かに遺存し、壁・立柱の基礎台木から方形平面は明確である。その内側には、若干方位がずれるけれども一辺約1.2m程の方形部分があり、まさに中心に塔を置く右邊礼拝の通廊を作る回字方形プランの寺院遺構である。カラドン61号寺院よりは小型であり、回廊も二重ではない点では確かに小規模といえる。しかし、この寺院跡からも二つの壁画が得られている(第6図)。一つは報告書中にも掲載されている第6図1であり、正面向きの堂々たる如来像である。「シルクロード展」にも出陳されていて、報告書でも上半身の図しか知られなかったが、前者の解説では、他に下部の破片も採集されており、蓮台上に結跏趺座する座像であるという。黒色の袈裟が際立つ仏像で、顔面は黒の細線で鋭い表現を描き、唇は赤色で表現される。鼻下に八の字の口髭をたくわえている。耳は長く、下端がとがる。頭部は螺髪と見られるが肉髻部分は欠けている。円形頭光は赤色の外縁線から褐色・黄色と内側に推移する。衣は通肩である。他の2は、「シルクロード展」の写真に知られるが、最近刊行された仏教大学研究機構の『シルクロード・ニヤ遺跡の謎』に顔面上部の出土状態が見えている¹⁰⁾。この壁画は前者の写真では顔面円顔で、赤線で薄く描かれた下衣の上に、矢羽根状の文様を縦にもつ白色系の上衣をまとっている。耳は長く垂下するが、注意してみると左耳の先端にハート形の垂飾が認められる。その点も含めて考えると、この仏像の首には小玉を連ねた首飾りが見られ、又下衣の襟元に左前表現と見なされる合せ目うかがえそうであるし、頭光の表現もたどれないようである。印相についても、破片接合が正しいとしても両手を握り合せた如き複雑な表現をとって理解が難しい。全容が知り得ないもどかしさがあるが、他の如来像との対比からみてもこの仏像は特異な様相となり、菩薩像とすべきであろう。大きさは1と同じ位の上半身であるので、やはり座像であろう。この寺院跡の年代については、近くに発見されているスタイン隊の資料の泰始5年(269) 銘木簡を関連させれば3世紀後半も一つの示唆を与えるものとされるが、多少幅を見ておくのが良いと思われる。

なお、ニヤ遺跡では、他に長さ1.25cmの木彫の仏像表現をあらわすものな



第5図 ニヤ遺跡仏寺 (FS) 写真並に平面図 (仏教大学報告)

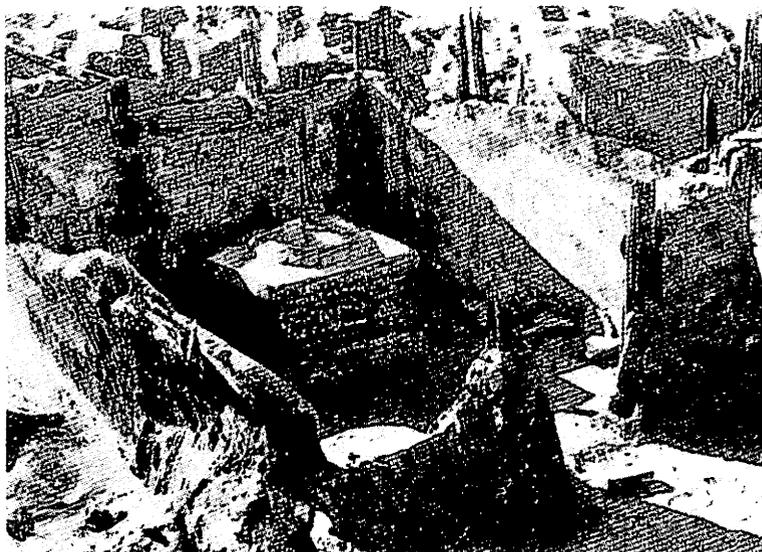


第6図 ニヤ遺跡93A35 (N5) 寺院壁画仏像 (仏教大学報告並「シルクロード展」参照)

ども出土しており、他にも小仏像断片などもあって興味ある資料と思われる。

仏教寺院の遺跡は、更にカラドン西南約110km程に位置するダンドンウィリクが著名である。やはりスタインがカラドン到達前に調査をした寺院跡で、カラドン61号と同様の塔中心の回字方形平面の遺構が比較的良好に知られていた(第7図)^(3m)。しかも、ここでも第8図にうかがえるように向って右側に大きな立像が蓮華座上に右脚と衣の裾をあらわし、左側に如来座像が一体見えている。その座像の右側に一部円光がうかがえるので、これらの小座像が横に配されていたものであろう。また、小座像の下方には二本の蓮華と一人の小人物がみられ、供養者を表現しているらしい。ここでは多彩な絵画が存在したようである。当然、このダンドンウィリク地域はカラドンも含めて漢代扞弥国であったし、後に于闐国に併合されていくが同一文化領域であることはうなづけるけれども、同様の寺院遺跡が存在していることはさらにカラドン寺院跡理解に資するところがある。

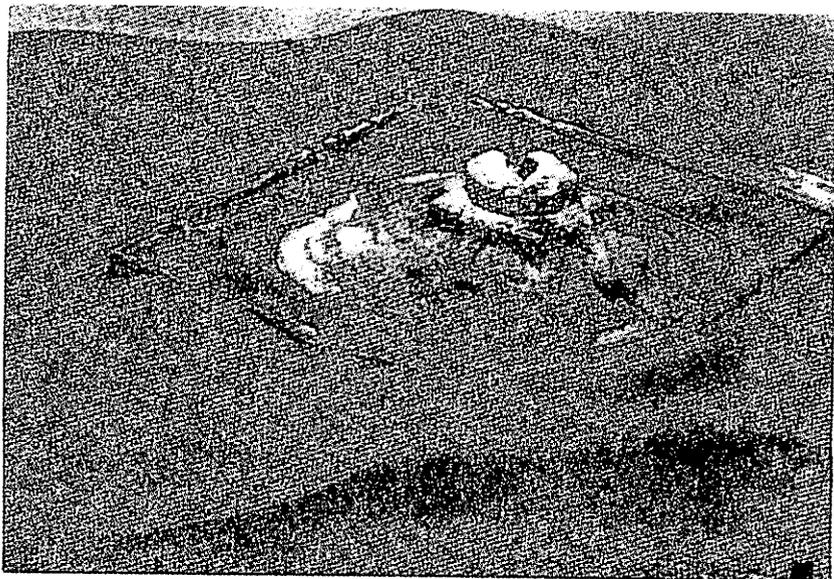
さらに沙漠中で著名な遺跡としては、カラドンより西南約200km程のラワク(熱瓦克)寺院跡があげられる。ラワクもまたスタインの調査⁽³⁾するところであった。第9図空中写真でも見られるように沙漠中に上円下方の塔跡が望め、その外側をとりまく回字方形の壁が見えている。その仏塔跡の調査では、壁面に立つ大小の塑像群すら遺存していた。ここでは、単に壁画表現だけでなく半浮彫の大型仏像も存在して豪華といえる(第10図)。この寺院は、外壁一辺45m、



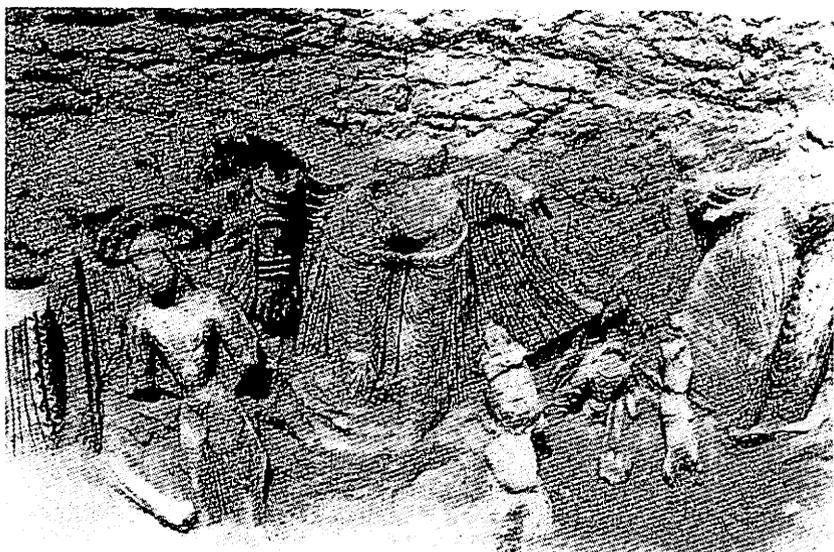
第7図 ダンダンウイリク仏堂DII (スタイン)



第8図 ダンダンウイリク仏堂DII壁画 (スタイン)



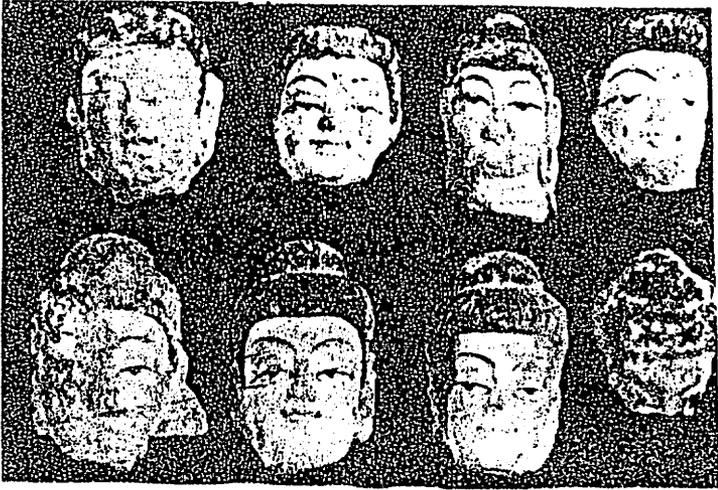
第9図 ラワク仏塔跡



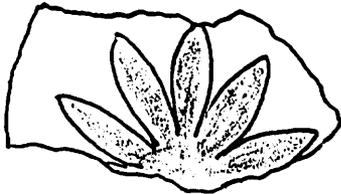
第10図 ラワク仏塔跡南東壁塑像(スタイン)

遺存高約3mで、塔も階段を四方にもつ直径9.5m前後の偉容を示し、今は大部分埋れているが周辺に小寺院や民居跡が幾つか存在しているといわれている。有数の寺院であったと思われるにも拘らず記録には出ていない。この調査は、スタイン以外にも黄文弼などの中国考古学者も行き、また洛浦県政府の地方機関も行なっている。洛浦から約50kmという距離からも侵入者も多く、自然と共に人為的損壊も甚しいとされ、遺物も散逸したといわれている。金箔や彩色の仏像もあったし、各種の遺物が採集されている。年代については、スタインも紀元後の数世紀としているが、ほぼ4世紀中葉から7世紀中葉頃とする中国側の見解もある。この例からみると、大規模な塔跡を遺す寺院跡にあつては、豊富な壁画や仏像が存在した可能性があり、今は面影もないオアシス地帯の寺院にはそのようなものがあつたのだろうと推測できるし、対照的にカラドン寺院などのような規模のものも集落毎にあつたことが類推できよう。

もう一例ここで取りあげたいのは、1992年に于田に程近いカズナック（喀孜納克）遺跡¹¹⁵で経験したところである。于田から郊外へ西約20kmの沙漠地帯に位置するこの遺跡は、かつてのケリヤ河の北北西へわかれた支流の一つとみられる幅200m程の旧河床の西側にあつた。旧河床からのぼって見た風景は、遺跡など全く予測もできない駱駝草が点在する沙漠であつた。案内に頼んだウイグル人が肩にしてきたカンドマン（鋤）を一振りして掘った土の中に壁画残片が出てきたのには驚いた。ほんの僅かにくぼんだところが近年発掘された寺院跡であつた。その折に8個の小仏頭が出土したと伝えられているが、同行した中国科学院地理研究所の王守春氏によると、他にも仏像の型や壁画が発見されたい。砂質土層内には日乾煉瓦かと思われ表面に漆喰を塗った下地の上に、各種の顔料で彩色された壁画片が認められた。しかし、掘り出された壁画は極度の乾燥下で脆くなっており、手にとるとパラパラと崩れてしまう。その中の1片を写真にとったのをスケッチしたのが第11図下の花卉文様であり、蓮弁様のものが黒味の顔料で描かれていた。この寺院跡の調査結果については未見であるが、仏頭8個の写真は李吟屏「仏国于闐」³⁸書図版中に見ることができた（第11図）。目鼻立ちのはっきりした、肉髻・螺髪³⁸の仏頭である。詳細についてはなお分明ではない。李氏のキャプションでは南北朝とされ、泥塑像とされているところでは壁面に立並べられた半浮彫の塑像であつたろう。周壁は一辺



(李吟屏)



第11図 カズナック仏寺の仏頭と壁画蓮花文

12 m程と測った。この西方を歩いた時、若干の遺物が散在し、所によっては民居の壁下の痕跡かと思われるタマリスクの柴列などが見られたところがあった。さらに注目されたのは、高さ5 m程の土堆が幾つか存在し、その一つの崩壊断面には白い漆喰面が見えていたことである。余りにも薄く、すぐ崩れる白色層であったが、あれは何であったか気懸りな遺跡であった。

第5章 沙漠中央部の寺院遺跡の意義

前章では、カラドン遺跡寺院跡と関連して周辺の若干の寺院遺跡をとりあげ

て見てきた。そこでは、幾つかの寺院のタイプがあり、屢々壁画が見られるものらしいことが推測されてくる。このタクラマカン西南部地域は、古代においては極めて仏教の栄えた地域であったが、石窟の存在する天山南道や河西回廊のようには明らかでないところがあり、文献で知られる程にはわからない点が多かった。しかし、スタインの発見以来一世紀の近年、特に1990年代に入ってから次第に明らかとなってきたところがある。

まず一つは、良くいわれてきたように仏寺においては塔を中心として造られるという基本は、崑崙山脈を北に越えたこの地域でも原則的には同様であり、大型仏塔をもつ大規模寺院から小規模寺院まで、オアシスから沙漠中の集落まで認められる。勿論大型仏塔の例では、概して日乾煉瓦積のものようであり、小規模例では寺院中心の塔は粘土積が多く、顕著な遺存はみられず、木製台縁に跡づけられるものが多い。平面構造では塔中心の右邊礼拝用の回廊を作り出している。ニヤ例では一重の回廊例と見られたが、カラドンは二重の回廊例であった。塔身部の具体的内部構造も不明であるけれども、ラワク寺院の規模では上円下方で円筒状の身部といわれる。下方部には四辺に階段も設けられ、インド方面の仏塔の形式をよく踏まえている。このような整った規模の寺院は、各有力オアシスに存在したものであろう。顕著な仏塔遺跡の遺存するところは、この種のものであろう。それでも、実は現在のオアシス近傍では破壊されてしまっただけでなくなくなっていて、ホータンオアシス付近ではヨートカンでもメリカワチでも不明となっている。そして、これらの寺院壁面には仏像などの絵画が描かれていることがカラドンなどの例でも判明してきたといえる。壁画の見られないような小規模なものも無かったとはいえないが、少なくともニヤの一边5mクラスでも立派な仏画が存在したことが知られてきているので、一般的に寺院構造のものには壁画を想定してよからう。

寺院壁面荘嚴としては、これまで見てきた諸例からも知られるように如来の立像・座像などが見られる。更にラワク寺院のように整った半浮彫仏像を配するものもあり、規模に伴って塑像などが作られて華やかになる。ほぼこれらの事実から、当時の寺院遺跡の絵画・塑像の様相が推測できそうである。壁画の主題は、カラドン寺院のように如来立像・座像に徹する例もあるようであるが、ニヤの1体は菩薩かと思われるし、ラワクでは多彩な仏像があつて、比丘・供

養人・守衛まで揃っている。規模・時期などによっても異なるものがあるだろうが、多彩な絵画そして彫刻をみる事が可能である。そこで思われるのは、石窟寺院の一窟の壁画・彫刻である。そこには実に共通する要素が読みとれるのであり、石窟か開地の平地寺院という差である。確かに西域南道の沙漠地帯では石窟が見当らない地域であるが、遺跡中にはかなりの度合いで平地寺院跡が指摘でき、極言すれば集落あるところ必ず寺院があるとさえいえる。寺院跡においても、大規模なラワクの如きは近接して小寺院もあることが述べられているし、或いは一画をなす寺院群もあるのかと思われる。文献に見える于闐国の大伽藍などはそのようなものかと思う。大石窟は特別としても、沙漠の寺院もまた理解を新にして見直すべきかと思われる。

もう一つは、寺院遺跡と集落の構成の問題がある。カラドン61号寺院は、分布調査で比較的遺物散布が多いところにあった。寺院の主要建物は、当然周囲にそれと伴う建物が配されていたであろうし、加えて仏寺に礼拝に赴く住人達もかなりの数で居住する集落を背景として有するものであろう。今知られるカラドン遺跡でも2寺院跡が明らかとなっており、ニヤ遺跡でも日乾煉瓦積塔と調査寺院例が知られ、その他にも予測されるものがある。とすれば、少くとも旧オアシス集落には2・3以上の寺院があったことは確実である。かつて、『魏書』西域伝にも于闐は「俗重仏法、寺塔僧尼甚衆」とされたこと、『大唐西域記』の「伽藍百余所、僧徒五千余人」とされる盛況が具体的に推測可能になるかとさえ考えられる。因みに、最も年代的にも可能性に富む時期となる魏晉南北朝期は、このケリヤ河以西のホータン地域は于闐国の領域であった。寺院跡の上限が一部漢代にさかのぼるものもあろうことはいうまでもない。

むすび

以上、筆者も訪れる機会があったカラドン遺跡での寺院跡調査例を緒として、タクラマカン西南部沙漠地帯の寺院及び壁画について述べてきた。そこで強調できることは、この沙漠地帯の寺院は、建物構造としては回字形平面で、塔中心の右邊礼拝の回廊を一重・二重などに配するものであり、その回廊壁面には仏教壁画が描かれている。その壁画には如来像＝仏陀像を基本として描出し、

立像・座像が見られ、規模の大きなものでは半浮彫塑像表現などが知られ、画題にも多彩なものがあるようである。ある意味では石窟壁画の沙漠版である。いわば、違いは沙漠集落の中の一構成要素として存在していることがあげられよう。カラドン遺跡のように沙漠奥部の遺跡でもこのような寺院があることは予想以上のものであったが、ニヤ遺跡やダンダンウィリク遺跡の例からみてもどうやら沙漠の遺跡でも周縁オアシス地帯と大きく異ならない集落があり、寺院が伴うらしい。実はそのようなあり方は、沙漠奥部は相互交流の絶えた行き止まりの地と意識した我々の理解不足であって、集落遺跡間でもかなり共通性を持ち、仏寺を造り、仏教を信仰する程に交流があったこと示している。仏教もはるかに崑崙山脈を越えて伝来するが、実はこの地域の住民は人類学的にもアリア系の特徴を持ち、文字もカロシュティー文字を使う人々であった。そして更に沙漠を超えた天山山脈南側の住民とも交流があった。文献上でも若干たどれるが、ホータン河やケリヤ河をたどる道筋は、かなり使われたルートであり、今でもウイグル牧畜民は往来している。その事が、沙漠奥部とするところの文化も僻遠地などとするものではないことを示している。一例として第12図にアカンサスの壁画文様をあげておこう。小異はあるとしても、カラドン寺院とキジル石窟の壁面を飾るアカンサス文様は類似するものがあり、両者にも交流があったことを知ることができる。これらからしても、沙漠の寺院遺跡は、今後より広域的に検討していく必要を感じるところである。



1 カラドン寺院壁画



2 キジル石窟壁画

第12図 壁画装飾文様

末尾になったが、このようなことを考える契機を与えてくれた日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査隊のメンバーに感謝すると共に、特に、ニヤ遺跡の調査報告書を御配慮いただいた仏教大学教授杉本憲司教授にお礼を申し上げる次第である。

(注)

- (1) 法政大学タクラマカン沙漠調査実行委員会「法政大学タクラマカン沙漠調査概要報告書」1993, 法政大学タクラマカン委員会「沙漠・水・人間——日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査報告書——」1995
- (2) Sven Hedin. *My Life as an Explorer*, Oxford, 1991
- (3) M. Aurel Stein. *Sand-Buried of Khotan*, London, 1904
オーレル・スタイン著, 山口静一・五代徹訳「砂に埋もれたホータンの廃墟」1999.
- (4) 新疆文物考古研究所・法国科学研究中心315所中法克里雅河考古隊「新疆克里雅河流域考古調査概述」(『考古』1998年第12期(総375期))
- (5) 東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション「日中国交正常化30周年記念 シルクロード 絹と黄金の道」No 124 ~ 127 及びNo 115, 116, 2002
- (6) 注(2)P.160
- (7) 新疆克里雅河及塔克拉瑪干科学探検考察隊「克里雅河及塔克拉瑪干科学探検考察報告」北京, 1991
- (8) 注(7)P.98 ~ 116
- (9) 注(8)では忍冬文としているが、どちらかといえばギリシア風のアカンサス文様である。
- (10) 注(7)P.100
- (11) M. Aurel Stein. *Ancient Khotan*, Oxford, 1907 付図第38図版
- (12) 伊藤玄三「克里雅河流域の考古学的遺跡」(注(1)前掲, 「沙漠・水・人間——日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査報告書——」第7図)
- (13) 城堡西南の仏寺遺址とN62は絶対的に同一であるとは確認していないが, 方位・距離などより同一と見得る可能性は強いと考えた。
- (14) 注(7)P.100
- (15) 注(5)P.135解説
- (16) 中日共同尼雅遺跡学術考察隊編「中日・日中共同尼雅遺跡学術調査報告書」第二卷, 1999
- (17) 仏教大学ニヤ遺跡学術研究機構代表中井真孝・小島康替編「シルクロード・ニヤ遺跡の謎」P. 131, 2002
- (18) 伊藤玄三・小倉淳一・田部秀男「タクラマカン沙漠の遺跡調査」(『法政大学タク

ラマカン沙漠調査概要報告書』) 1993

(19) 李吟屏『仏国于闐』図版⑦, 1991